



## 板橋の養育院キャンパス

稲松孝思

「養育院」は、1872(明治5年)に大久保一翁府知事の時に作られた、身寄りのない困窮者を保護する施設である。その維持、発展には半世紀を超える渋沢栄一の尽力が大きく貢献している。養育院運営の中核である本院は、本郷⇒上野⇒神田和泉町⇒本所長岡町⇒大塚辻町と転々としている。大規模化し、目的に合わせた分院が次々と設置されたのは、東京市営となった大塚本院の時代である。渋沢養育院長のもとで、幹事の安達憲忠や田中太郎、医師の入沢達吉、光田健輔らの尽力でなされたことである。また、大塚が繁華になり、施設の大型化に伴い手狭になったため、大塚の敷地を売却し、多方面からの寄付を集め、板橋の地主の協力を得て、広大な土地を確保した。1914(大正3)年に慢性疾患患者(結核)用に板橋分院を東武東上線の西側に開設した。引き続き東側の競馬場跡地の南側に、本院の移設工事を行っていた。新築完成直前の1923(大正12)年に、関東大震災で、大塚本院が壊滅したため、急遽本院を板橋に移転した。

板橋に移転後、渋沢の貢献を顕彰する東京市民の会が作られ、1925(大正14)年に台座を含めて高さ8mの巨大な銅像が作られた。除幕式には渋沢本人も参列し、銅像の前で謝辞を述べている。写真は新築の板橋本院を背にする渋沢銅像である。

昨年、旧養育院職員の営繕課長を勤めた故金山栄治さんのご遺族から、「養育院建築史」と関連資料を寄託された。養育院100年史の基礎資料として作られた手書きの資料である。その中に、1970年ころまでの、板橋キャンパスの推移を書いた興味深いものがあった。その後、独立法人化に伴う大きな変化もあるが、それを含めて板橋キャンパスの変遷についてまとめてみた。

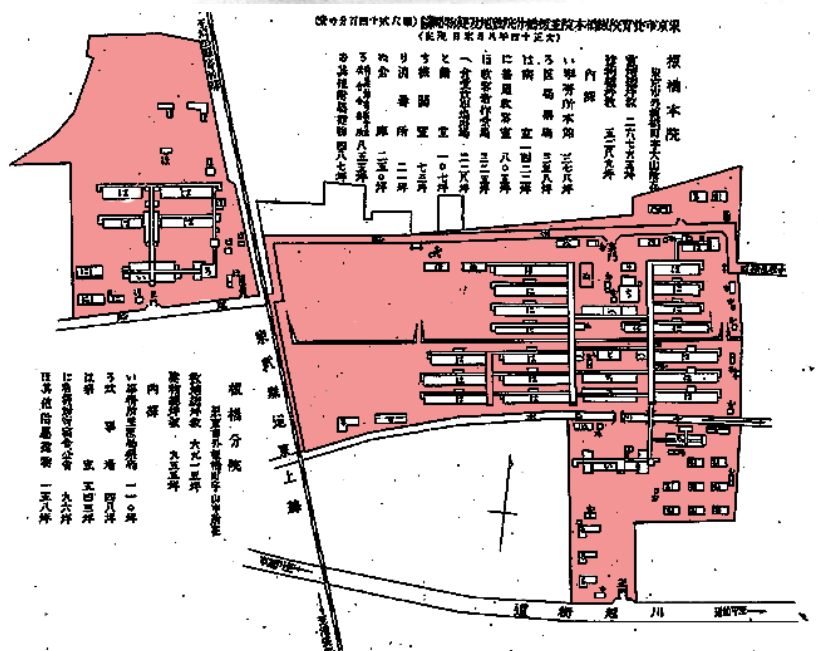
## 板橋キャンパス 1940(昭和15)年ころまでの変遷

大正14年に板橋本院が完成したころの地図を示す。旧川越街道に面して、本院事務所。銅像を中心とした庭園、職員宿舎、楽翁亭が作られた。敷地内を貫く千川用水を隔てて、老人ホーム(恵風寮4棟+食堂)、育児室、礼拝堂、家族室、自習寮、ボイラー室、防火壁などが30棟ほどの建物が作られている。本院から施設に行くために千川用水に橋がかけられた。昭和5年に千川用水は暗渠化され、都市計画道路(養育院通り)が作られ、用水の橋は道路をまたぐ上屋附陸橋となった(櫻園通信16号)。

## “養育院”とは

精神病、ハンセン氏病、児童福祉、高齢者福祉などで専門の施設に発展し、そのことが、日本の医療・福祉の歴史になっている。

- 時代の求めに応じて、医療・福祉事業を展開
  - 狂人病室設置(明8) ⇒ 癲狂院 ⇒ 巢鴨病院 ⇒ 松沢病院
  - 捨児・迷子の養育(明18) 里親・職親制度、児教育、幼童室 ⇒ 巢鴨分院 ⇒ 石神井学園
  - 回春室:ハンセン病(明32) ⇒ 多摩全生園、長島愛生園など
  - 結核病室(明22) ⇒ 勝山保養所、安房分院、板橋分院
  - 感化部(明38) ⇒ 井の頭学校 ⇒ 萩山実務学校、八街学園
  - 安房臨海保養所・分院(明33): 虚弱児 ⇒ 船形学園、
  - 長浦更正農場(昭17): 障害児 ⇒ 千葉福祉園
  - 看護養成所(明29) ⇒ 板橋看護専門学校



また、東上線を超えた西側の敷地には、慢性疾患患者の板橋分院があり、昭和10年に外来診療棟で一般住民の診療も始めている。男子病棟6棟、女子・児童棟3棟、回復期棟1棟、隔離病棟1棟、分室等4棟。地域住民の訴えで、周辺は高い塀で囲まれていた。大正14年の段階で板橋本院は敷地総坪数26,535坪、建物5,289坪、板橋分院敷地6,915坪、建物955坪であり、大塚本院の敷地15,090坪、建物3,560坪と、倍以上の広さになる。



## 北部大空襲(昭和20年4月13日)

米軍のB29による焼夷弾の無差別爆撃の洗礼を受け、板橋本院の建物78棟5,627坪、ボイラー、厨房設備、附属工作物など、9割の建物が灰燼に帰し、当日の在院者1,599人中、107人の犠牲者を出した。焼け残ったのは、恵風寮と育児室のみの1割程度の建物であった。この日の北部大空襲では都民2,459人の死亡が報告されている。

## 焼け跡からの復興

終戦当時の在院者は従来からの1,200人程度であったが、これに加え、戦災被害者、戦後の外地引揚者、戦災孤児などの新たな収容が求められ、昭和20年末の在院者は11,422人を数え、若年者も多く混乱を極めた。昭和21年には元陸軍造兵廠大山宿舎を医務課・養育院附属病院とし、昭和33年に、板橋区栄町に新病院が出来るまで移動した。(櫻園通信49号)。

また、第一陸軍練馬造兵廠への本院移転も模索されたが、GHQとの関係でうまくいかず、一部を使用して昭和22年12(9)月に練馬分院を移動させた。開設1ヵ月後の在院者は232名、昭和27年3月には486名であった。昭和30年に東村山分院完成後、収容者は移り、練馬分院は閉鎖された。(櫻園通信x)

戦後の特殊事情として、昭和21年には上野などの浮浪児化した戦災孤児を毎月2~3回、40~50人程度収容した。逃亡者が続出して35%に上り、逃亡を阻止する様にとのGHQの指示で、竹囲が作られた。

## 板橋区の都市計画との葛藤

養育院は、戦災跡地に新しい施設を建てることを検討していた。一方、板橋区ではこの機に養育院を移転させ、跡地を公園などにする都市計画を提案し、養育院施設を追い出すキャンペーンが張られた。種々の困難な協議が行われた。昭和24年4月の協議会におけるGHQ民生局のキャロウ女子の発言で、養育院の現地復興が決定し、用地の一部を、学校、文化施設、公園用地を割譲することで、妥協が図られた。この辺の事情については、櫻園通信52号の金山氏の記録に譲る。なお、戦後、アメリカの大量のララ物資の供与、慰問団の訪問が行われている。また、皇室の高松宮、梨本宮妃、が訪れ、昭和24年3月には、昭和天皇ご夫妻が行幸された。東京の代表的な福祉施設である養育院の民生上の重要性を考えた判断と思われる。

## 昭和47年の板橋の養育院

東京都の中期計画で美濃都都知事の時代に、将来の高齢化時代を見据えた計画が実施された。従来からの養育院高齢者を対象とする老人ホームを維持する一方、一般都民をも対象とした11階建ての新病院、老人総合研究所、板橋ナースングホームなどの新規高齢者施設が次々建てられ、板橋の養育院事業は老人問題に特化して行く。また、板橋分院は、看護学校、職員寮、一部病院の建物となった。病院-高齢者施設-研究所の三位一体の運営が試みられた時代である。昭和50年ごろの各施設の模型を写真に示す。またこの時期に、東村山に養育院分院、第二附属病院が作られ、養育院事業のひとつの柱となった。

## 養育院の廃止と関連施設の独立法人化

平成10年に、養育院の本院機能は新宿の都庁に移り、養育院条例は廃止された。東京都は、都立病院、福祉施設、研究所



の全都的再編を行い、その中で、養育院の板橋施設は、平成 21 年に地方行政独立法人東京都健康長寿医療センターとなった。高齢者の急性期病態に特化した病院と研究所を合体させたセンターである。新センターの建設、板橋看護学校移転、公設民営化の老健施設クローバーの里が設置された。また、区民用の自転車置き場、周辺道路用地など、用地の蚕食が続き、余剰地は東京都の用地として、利用方法が模索されている。新たな高齢化時代への対応を地域の医療機関、福祉機関との連携で、進めてゆくことになるが、その行方を渋沢銅像は見つめている。養育院—渋澤の精神を生かした施設建設が望まれる。

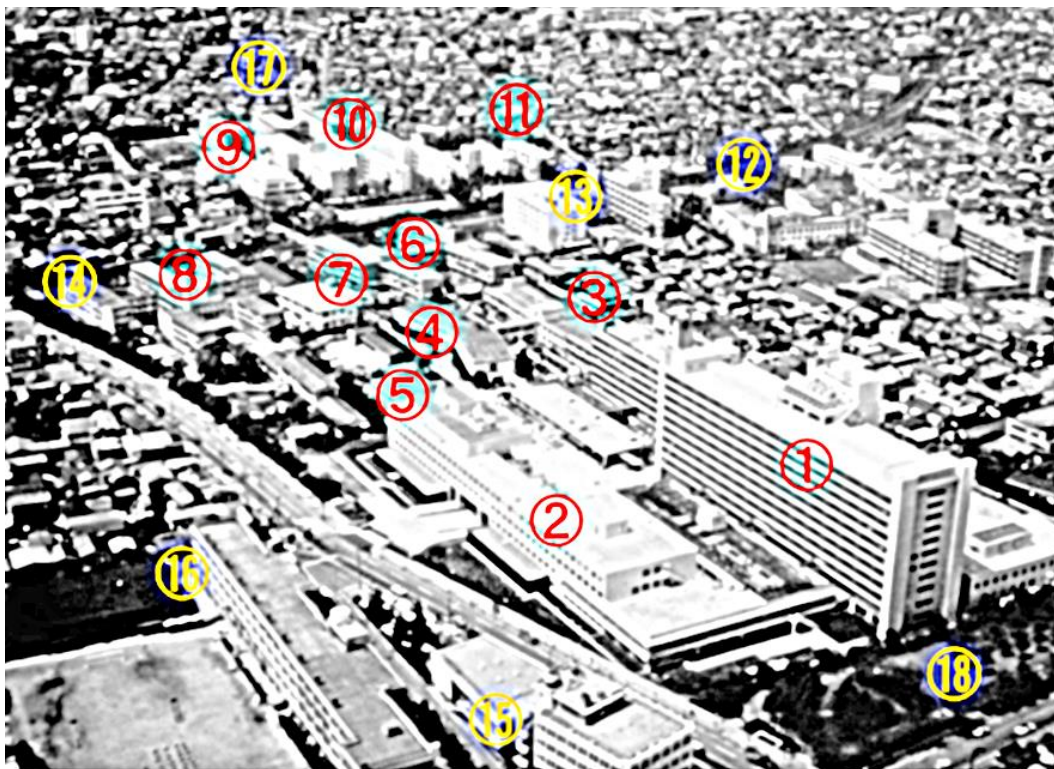
## 昭和 30 年ころの養育院用地の板橋区への移譲

板橋一中、板橋大山公園、文化会館などが作られた

養育院用地  
1945→1960



## 昭和 50 年ころの板橋キャンパスの全景



- ①旧老人医療センター    ②旧東京都老人研究所    ③旧板橋ナースィングホーム    ④旧旧東京都養育院付属病院
- ⑤養育院講堂    ⑥恵風寮(老人ホーム)    ⑦養育院作業棟    ⑧明々寮(老人ホーム)    ⑨板橋看護学校
- ⑩養育院看護・保母寮    ⑪医師公舎    ⑫豊島病院    ⑬豊島看護学校    ⑭養育院前交番    ⑮板橋産業文化会館
- ⑯板橋第一中学校    ⑰御茶ノ水大学寮    ⑱板橋公園

## 健康長寿医療センターの敷地

旧養育院用地(1940)と健康長寿医療センター(2019)

①→②→③→④→⑤は渋沢栄一銅像の位置の変遷を示す。



手前は老人医療センター・老人総合研究所  
左奥の建設中の建物が、現東京都健康長寿医療センター

